

幼稚園

インフルエンザ流行に対処して

附属幼稚園 養護教諭

清水 智佳子



幼稚園にも  
保健室の先生がいます

附属幼稚園に養護教諭が定員配置されて、丸十年が経とうとしています。子どもたちが自立に向けて、健康で安全な生活の基盤となる基本的な習慣や態度を身につけられるよう、園の中の遊びや生活の中で、自身が『動く保健室』として、清潔、感染予防、睡眠、食事、安全などの面から、養護教諭の視点で援助しています。

機会をとらえて  
自分でできることから

子どもたち自らの生活と関連づけながら、健康について考えられるように、機会をとらえて保健指導を行っています。今年の新型インフルエンザ国内感染者発生以来、幼稚園としても予防策として、子どもたちに手洗い保健指導を行いました。指の間や指を一本ずつ丁寧に洗うことや、手首やひじまで洗うことも伝えました。保健指導という特別な時間だけでなく、幼児と一緒に生活しながら、日常生活の中で気がついた時に継続できるように、ほかの教職員と連携しながら、日々の生活の中で繰り返し援助していくことも心がけています。

せんせい やってみる！

毎年の保健指導の中で、子どもたちがお気に入りなのが、『まほうがい』。この『まほうがい』は、『まー』と言うとするとウイルスの感染しやすい扁桃腺に水が当たり、『ほー』と言うと、こちらもウイルスの感染しやすい口蓋垂に水が当たるので効果的と、新聞で紹介されていたものを取り入れました。よく言う「がらがらがいがい」は子どもたちには難しいようで、水を含んで天井を向くと、口からすぐ水がこぼれてしまう子どももいます。

「まほうがいは、かぜをひかないおまじない」「水を口に入れてね、天井を向いて、『まー』『ほー』という、のどがすっきりきもちよくなるの」と、実際に子どもたちの目の前でやってみせます。子どもたちは興味津々、とても熱心に話を聞いています。「せんせい やってみる！」と、子どもたちは即実行。「まーほーいつていうときもちいいなあ」「まーほーのうがいがやったらできるわ」「うちでもまいにちやったほうがええな」「おかあさんにも教えてあげよう」と、喜んで話しています。指導の内容は、保護者の方にも「ほけん



登園してすぐに手洗い・うがいをする子どもたち

二学期からさっそく対策を

今年の秋以降、新型インフルエンザの流

だより」を通じて伝えるようにしています。子どもたちの意欲的な姿を保護者の方にも認めてもらったり、親子で一緒に健康について考えてもらったりするきっかけになれば...と考えています。

小学校

「たかまどの会」の活動

「学校教育への理解と支えを自然な形で」

附属小学校 主幹教諭

中村 幸成



「たかまどの会」の発足

「たかまどの会」は、「父親も何かできることを」ということで、数年前PTAのボランティア組織として発足しました。土・日曜日など、休日に動きやすい男性保護者が中心となり、親・子ども・教員のつながりを深めようと活動しています。これまで、行事の企画・運営や、学校行事でのボランティア活動などを行ってきました。また、会員相互の親睦を深める意味で、ソフトボールも行っています。

「山焼きを見る会」  
「親子プール」で

「山焼きを見る会」は、若草山が附属小学校の目の前に望めることから、校舎の三階や屋上から、親子で山焼きを見ることが行事です。受付から誘導、そして山焼きの



「たかまどの会」主催の「親子プール」

歴史の説明も、「たかまどの会」のメンバーが行います。「親子お正月遊び」と組み合わせで行ったこともありました。

「親子プール」は、夏休みのはじめに親子で泳いだりゲームをしたりして、プールで楽しい半日を過ごすというものです。いずれも参加するだけでなく、同じ学校に通う子どもの保護者が顔を合わせ、親しくなる機会となつています。また、夜間の行事やプールでは安全の確保が欠かせませんが、これも「たかまどの会」が細かな配慮をして取り組んでいます。

フィールドワークや体育大会で

フィールドワークは、ふるさとである奈良の自然をはじめ、地域を知る取り組みとして学校が行っており「たかまどの会」はそういった行事にも参加しています。野外では、子どもへの心配りや助言など、見守り役として関わるだけでなく、そこには子どもと一緒に大人も学んでいる姿があり、子どもたちもそのことがうれしい様子です。そのほか、体育大会での安全管理やかたづけ、ふだんできにくい溝の掃除や草刈りといった、教育環境を整える活動もしています。

そして、このような具体的な活動を通して、自然な形でみんなの気持ちや学校や教育に寄せられていけば...と思っています。

中学校

未来を創るのはわたしたち

「2009ユネスコ東アジア子ども芸術祭イン奈良の活動から」

附属中学校 教諭

小嶋 祐侗郎



6つの国や地域が  
歌やゲームで交流

「Learn to Live Together」共に生きることを学ぶ」をテーマに、8月6日から8日にかけて、「2009ユネスコ東アジア子ども芸術祭イン奈良」が開催されました。本校はASP（ユネスコ協同学校、以下ユネスコ・スクールと記す）加盟校であることから、奈良女子大学附属中等教育学校、奈良市立飛鳥小学校の児童生徒と共に、8月7日に大学講堂において交流会を実施しました。

当日は、中国・韓国・モンゴル・マカオ・香港の五つの国や地域から訪れた百名余りの生徒や引率者と共に、日本の三校の生徒が企画した歌や演奏、ゲームを楽しみ、その後昼食会となりました。訪問団の午後の予定もあり、短い時間の交流プログラムではありましたが、終始笑顔と歓声に包まれた、和やかで楽しいひとときを過ごすことができました。

日本の生徒がおこなった中国語やモンゴル語での挨拶では、それぞれの国の子どもたちから大きな歓声が起こり、また本校の生徒が用意した各国の世界遺産を題材にしたクイズでは、ステージとフロアが一体化した熱気に包まれました。「言葉はうまく通じなくても、一生懸命やれば心は通

じ合うことがわかった」「同じ東アジアの子どもなのだとも感じた」という生徒たちの感想からも、この活動が彼らにとつて、平和や相互理解のヒントを受け取る貴重な体験となったことが伺われました。

ユネスコ・スクールとして

近年、国際理解教育やESD（持続可能な開発のための教育）の推進役として、ユネスコ・スクールの活動の充実が唱えられ、加盟校が急増しています。本校は、ホールスクールプロジェクトとしてこれに取り組んでいます。黎明期から発展期を迎えつつあるユネスコ・スクール活動の西日本の拠点となるべく、大学ともいっそう連携を深め、実践研究を推進していきたいと願っております。

「未来を創るのはわたしたち若者です。どうか輝かしい未来のためにつながりあいましょう」という、閉会の際の言葉を表現させるためにも、この活動を大きな糧にしたいと思っています。



交流活動の様子